

竣工当時、山陰一を誇る RC ゲルバー橋 その名は神話に由来

かんだち 神立橋



旧暦十月は神無月ですが、出雲では神在月と言われます。全国の八百万神が国家安泰、五穀豊穡、縁結び等の神議をするために出雲に集まるからです。八百万神は、出雲大社、佐太神社などで神議をした後、万九千社で別れの宴をすませて各地へ帰られます。この時、万九千社の神官が「お立ち、お立ち」と神等去出を告げ、神々が出立になることから「神立」の地名がついたということです。

『出雲国風土記』には「通道」として道のりや駅、橋、渡しなどの施設が記されています。このなかで出雲国府(松江市大草町)から西に向う「正西道」は、宍道駅、狭結駅、多岐駅などを経て石見に通じていました。その道のりは約 74.5 km で、現在の国道 9 号と大差はなかったようです。

近代に入ると山陰道は国道に指定され、三重大道改修事業によって幅 3 間(約 5.4 m)の車両が通行できる道路となりました。当時の斐伊川には中土手があり、西の左岸まで幅 200 m に水が流れ、中土手から右岸までは新田に道路がありました。神立橋が幅 3 間の板橋に整備されたのは西橋が明治 21 (1888) 年、東橋はその 3 年後でしたが、2 年後には洪水後の河川改修で 1 橋となりました。

江戸時代より神立橋は木橋でしたが、昭和 7 年斐伊川河川改修事業により昭和 11 (1936) 年 6 月着手、同 13 年 8 月に 18 径間の鉄筋コンクリート桁橋(長さ 417 m)に生まれ変わりました。当初橋台 2 基・橋脚 17 基の基礎は木杭・木製井筒の設計でしたが、複雑な地質層が判明したため、右岸橋台 1 基を除きすべて鉄筋コンクリート井筒の基礎に変更となりました。

神立橋は出雲への道として重要な橋梁にもかかわらず、交通量の増大で渋滞が日常的となっていました。この解消案の改築計画から 30 数年、出雲バイパス事業は平成 19 年によく全線開通しました。長年待ち望んだバイパスに新設された橋は「神立」と因縁深い「からさで」と名付けられました。

平成 21 年、建設当時は山陰一を誇った神立橋も、地震に対する補強工事や路面の補修工事が行われました。橋桁を連結させ橋の構造を一体とすることで地震に抵抗できるうえに、車両が通過するときの振動を取り除くことができました。神立橋はその名が表すように、斐伊川を渡る重要な橋として、出雲の地域の拠り所として存在し続けていくことでしょう。

■位置図



花崗岩に意匠を凝らした親柱
東西の欄干の燈籠とあわせて 10 組が照らす。



橋の袂斐伊川町側に立つ「神立の由来」
神代の昔から旧暦十月は、全国の神々が出雲国にお集まりになり、おまつりや会議をなさるので神無月とい
い出雲では神在月といわれてきました・・・



まぐせのやし
万九千社
もとは斐伊川の中洲に鎮座していたが、寛文 10 (1670)
年頃、洪水により現在の万九千社境内に遷された。



18 径間の鉄筋コンクリート橋「神立橋」
L=417m 有効幅員 7.5 m